

対魔忍

アサギ

恥虐の
暗黒遊戯

立ち読み版

原作 Lilith

小説 Kyphosus

表紙 カガミ

挿絵 2号



登場人物紹介

Characters

いがわ 井河アサギ

日本の闇で跋扈する妖魔たちと闘う、公安調査庁下の対魔忍の隊長。優れた剣術と体術で、最強のくノ一として目されている。かつての任務で恋人の恭介を亡くし、臍から性感を増幅させられる肉體改造を受けるも、強靱な精神力で対魔忍として戦い続けている。



いがわ 井河さくら

アサギの妹で、同じく対魔忍として妖魔たちと闘っている。彼女もまた姉とともに臍から肉體改造を受けているが、薬によりその後遺症を抑えている。一見、アサギとは正反対の活発で勝気すぎる性格に見えるが、その実、姉思いの少女。



おぼろ
朧

妖魔や傭兵を操り、日本社会の闇で暗躍する邪悪なくノ一。一度アサギに倒されるも、多国籍複合企業体・ノマドの創始者であるエドウィン・ブラックの軍門に下り復活、井河姉妹への復讐の機会を狙っている。



スネークレディ

朧が管理する闇の闘技場「カオス・アリーナ」の人気女戦士。本名はカリヤ。かつて、捕らわれたアサギを甦ることに悦びを感じ、執着していた。ナーガ族と呼ばれる蛇神の末裔で、フタナリベニスを持つ。享樂的かつ奔放な性格。



やつくろう
八津九郎

盲目の対魔忍でアサギの部下。元はレンジャ一部隊の出身であり、そのパワーを活かしてアサギたちをサポートする、頼れる右腕。



エドウィン・ブラック

多国籍複合企業体・ノマドの創始者で、その正体は完全に不死身の吸血鬼。魔界の魑魅魍魎たちと結託し、日本の支配を狙う。



さわ ききょうすけ
沢木恭介

アサギの幼馴染にして婚約者だった青年。彼女を狙う朧の計略で、若くして命を落とす。

ぎん
銀

一族とその故郷を守るため朧に力を貸す、山奥出身の若いくノ一。通称「神寄山の銀」。

第一章	地底の戦い	007
第二章	フェロモン支配	042
第三章	暗黒ゲームの生贄	075
第四章	人間便器アサギ	150
第五章	性処理家畜姉妹	184
第六章	血闘	258

（何なの、どうして、私…こんな、敵の身体なの…欲しくて、しゃぶりたくてたまらなくなるなんて…ああ…）

しかし蛇女は、そんな彼女の衝動を見透かしたかのように笑った。

「ふふっ、でもお預け。次はさくらちゃんのおっぱい味わおうっ」と

（えっ…ああっ、そんな…う…違うっ…く、悔しくなんかっ…）

カリヤは姉の表情を楽しむかのようにゆっくりと身体を離しペニスを引き抜く。透明な粘液が糸を引いてこぼれ落ちた。そしてそのまま妹の前に立つと、その乳筒にすっかり熱くなった肉器官を突き上げるように押し込む。

「ひっ…ああっ…こんなっ…嫌っ…くっ…」

妹の反射的な抵抗を制圧するかのようには腰を突き出し、恥骨で乳首を押し潰す。

「んっ、いいわ、さくらちゃん…流石ね、アサギちゃんよりちよつと硬いけど、でもその分弾力が凄いわ…はっ、ああっ、なんか止まらない」

妹の瑞々しい乳房が気に入ったのか、カリヤの腰使いが早くなる。引き締まった下腹部に繋がれた乳首が押され、潰され、快楽電流を生じる。

「はっ、素敵、素敵よさくらちゃんっ…ね、お口使ってちょうだい…ふふ、アサギちゃんはまだお預けね。さくらちゃんに先に、フェラさせてあげる」

「ひっ…あっあ…こんなの、やっ…ああっ…んんんっ…んむっっ…」

カリヤは乳房を持ち上げでもするかのように、思いきり腰を突き上げ、ペニスを乳筒の

間から飛び出させてさくらの唇に押し込む。快感で意識の抑制が弱まったせいか、過去の陵辱でさんざん奉仕を教え込まれた身体は、突きつけられたペニスを受け入れた。

「くっ…さくらっ…ああ…はあっ…はっ…」

おずおずと這い回る舌の動きは、姉と違ってまだ多少たどどしいが、それがかえって陵辱者を興奮させ、嗜虐心に火を点ける。カリヤはさくらの頭を掴みながら腰を使い、巨根で唇を犯し始めた。激しい動きに汗が飛び散る。夥しい透明な先走りが妹の口内に吐き出されてこぼれ、顔や胸に滴っていく。

「おうっ…出してっあげるわっ…さくらちゃんっ…はあっ、はっ…見てる、アサギちゃんっ…私の精液でっ…貴方の大事な…さくらちゃんも、マーキングっ…精液…羨ましい、アサギちゃん？ …おおっ、おおおおっ！」

（はあっ、はあっ…くっ…止めてっ、さくらを、妹を汚さないでっ…う、羨ましくなんかっ…違うっ…そんなこと、あるわけないっ…ああっ…）

ぶぶっぶびゆるるるっっ…！

次の瞬間、まるで爆発が起きたかのように熱い白濁液がさくらの顔面に飛び散った。濃厚な生臭さと痺れるほどの強烈な芳香が、彼女の脳を直撃する。

「うああっ…ぶはっ…ぶほっ…凄いつ…お、多いっ…んんんっ…」

口内に常識外れの量の精液を注ぎ込まれ、むせかえるさくら。だが巨根アンドロギュヌスの射精は止まらない。

「おおおっ、まだ、まだよさくらちゃんっ、ほらっ、ほら飲んでっ…一緒よ、さくらちゃんも、アサギちゃんも私のものに…おおっ…してあげるんだからっ…おおおっ」
「んんんっ…！」

暴れる剛直をねじ込まれ、目を白黒させながら嘔き出る精液を必死で飲み込むさくら。
ぶびゅっ、ぶびゅびゅびゅっ…。

「おおっ、おおおっ…さくらちゃんに私の匂い、おおおっ…私の…っ」

カリヤは咆哮しながらペニスを振り回して精液をまき散らし、なすりつける。

「げほっ…凄いい、凄いいっ…はっ、ああっ…私、匂いがついちゃう…精液の匂いに、染められちゃう…あ、ああ…同じ…お姉ちゃんと同じ…はあ…匂い…」

止めどなく降りかかる精液を浴びて、朦朧とさくらが眩く。匂いに酔ったのだろうか、瞳は焦点を失い、緊張の解けた頬には蕩けた表情が浮かんでいた。

「さて、今度は同時に味わっちゃおうかな」

カリヤの目の前には、忍装束をあらかた破られてほぼ裸にされた姉妹が、抱き合うようにして横臥させられている。今度はピアスリングでお互いの乳房同士を繋げられてしまったため、身体を離すわけにはいかないのだ。

「くっ…こんなこと…さくら…私、貴方を巻き込んでしまったって…」

アサギは淫辱に妹を巻き込んでしまったことに後悔を感じていた。

「…お姉ちゃん、いいんだよそんなの…さくら、一緒にいるから…」

「はい、じゃあ二人でサンドイッチしてね」

両性具有の陵辱者は姉妹の身体の上にまたがる。そして屹立した長大な肉幹を向かい合わせの姉妹の脇腹のあたりに差し入れて、押し潰し合って密着状態にひしゃげている四つの乳房の合わせ目へとねじ込んだ。二人が抱き合っているせいで単独での時よりも伝わる圧迫感が強く、体温も高まっている。

「あはっ、ふふっ、二人分のおっぱい…いい、いいわよ」

「あっ…ああっ…っっ…さ、さくら…」

カリヤは腰をグラインドして姉妹の密着状態の乳房をペニスでかき回し、上下左右から立体的に加えられる、姉の柔らかな質感と妹の弾力性を楽しんだ。汗で湿った二人の柔肌が動きに合わせてぶちゅぶちゅと空気の入る音を立てる。さらに、姉妹が強く抱き合うと、陵辱器官が強く圧迫されて、すぎずきとした快感が強まる。引き出す時には乳房の柔肉が張り出したカリにひっかかり、押し込む時には亀頭前面がきめ細かな肌に磨かれるように擦られて、疼くような熱い愉悦が生じる。

そして往復する肉杭に乳房をこねられ、捻られる度に繋がれた乳首同士が押し合い、擦れ合い、引っぱり合う。その刺激に、性感を向上させられた姉妹の脳裏にはまばゆいほどの快感の火花が飛び散った。胸の狭間を出入りする両性具有者の巨根の熱っぽさと、亀頭から立ち昇る妖しい芳香が姉妹の脳に染み込み、理性を浸食していく。くつついた相手の

心臓がどきどきと高鳴り、駆け巡る血液が熱くなっているのがわかる。アサギとさくらは快楽をこらえるかのようにきつく抱き合い、裸の脚を絡ませ合い、吐息を漏らした。

(ああっ…っ…さくらと二人で、こんなことされて…気持ちよくなるなんてっ…)

相手の背中に伸ばした指は勝手に動き出し、背筋をこっそりと愛撫していた。

「ね、今度は二人で舐めて」

カリヤは浅い位置でのスリコギ運動から、深いグラインドへと腰の動きを変化させた。彼女の長いペニスを乳房の合わせ目に下から深く突き入れると、亀頭は姉妹の顎の位置にまで飛び出す。

「ほら、舐めてっば」

(そんなっ…さくらと抱き合った状態で…舐めるなんてっ…)

密着状態のせいか戸惑う姉妹に、カリヤはじれったそうな声を上げると両手で首の後ろを掴んで押しつけた。さらに芳香が強まり、アサギの欲情を揺さぶる。

(あっ…ああ…どうしてっ…匂いが…舌が勝手に…こんな…ああっ…美味し…っ)

妹の眼前でのフェラチオ奉仕に抵抗を覚えていたアサギだったが、先程からのお預けのせいか、芳香に誘われたかのように唇が開き、舌が意思に反して陵辱肉柱へと伸びた。

「んんっ…ぺろ…ぺちゃ、びちゃっ…んんっ…んむっ…」

一旦奉仕を開始すると、今まで刻み込まれた記憶が身体を勝手に動かし始めた。裏のくびれに舌を這わせる。張り出したカリーを唇で軽く挟み込み、吸い込む。姉の淫らな奉仕に

釣られたかのように、さくらもおおずおおずと眼前のそれに舌を差し伸べる。

「お姉ちゃん…んんっ、んむっ…」

姉妹の共同作業に徐々に熱が入っていく。二人がかりで肉樹を舌でなぞり、唇で吸い、キスをする。時折舌と舌がぶつかるが、それも気にならなくなってきた。

「んふ…んんっ…はあ…上手よ、アサギちゃん、さくらちゃん…おちんちん沢山沢山舐めたもんね…ああ、そう…二人で、ペニス越しにキスするみたいにして」

「ちゅぷっ…そ、そんなこと…じゅぷっ…キス…んんっ…なんて…れるれるっ…んんっ…口が…ああ…じゅぷっ…じゅぷっ…」

快楽に抵抗力を失ったのか、それともカリヤのペニスから放たれる芳香のせいかわれるがままに唇を大きく開き、両側から亀頭に吸いつくアサギとさくら。まるでそれが目の前の相手の一物であるかのように、熱心に唇を使い舌をうねらせる。アサギは妹の蕩けたような奉仕表情を見ながら、自分の中で何か別の淫らかな感情が膨らむのを感じた。

（ああ…さくらがフェラしてる…私の目の前で、こんなにいやらしく…舌と唇を使って…あ…舌が当たる…さくらの舌、当たっちゃった…）

さくらもまた、敬愛する姉が自分と抱き合いながら、陶酔の表情で敵肉を舐めしゃぶっているという事実に見失望ではなく、さらなる興奮を覚えた。

（お姉ちゃん、すごいエッチな顔してる…こんな格好させられているのに、あんなおいしいうに…エッチだよ、お姉ちゃん…私と同じ…やだ…なんか、どきどきしてきた…）

どくっ…どくどくっ…。

やがて透明な粘液が亀頭の頂からどくどくと滲み出すと、姉妹は先を争うように鈴口へと唇を寄せ、舐めとり始めた。

ぴちゅっ、ぴちゅっ…じゅじゅっ…れるっ、れるれるっ…ぷちゅっ、ぷちゅっ…。

「いいわ…二人とも情熱的で、すぐく素敵よ…ああっ…私もそろそろイっちゃいそう…」

発情カプルの愛撫にたまらなくなつたのか、カリヤは再び腰を使い始めた。ペニスを大きく引くと、亀頭に逃げられたアサギとさくらの唇がそのまま合わさる。ごく自然に吸い合い、舌を絡ませて姉妹はディープキスを交わした。

(あ…お姉ちゃん)

(さくら…ん…んんっ…)

カリヤが勢いよく腰を打ち下ろすと、舌を絡ませ合う姉妹の間に再び肉の拳が割り込んでくる。数秒間停止して、舌奉仕を楽しんでからまた腰を引き、撃ち込む。

「ふふ…二人とももうすっかり夢中ね。アサギちゃんもさくらちゃんもエッチすぎる身体してるから、私のフェロモンがよく効くわね」

快楽に陶醉する対魔忍達を眺めながら、楽しげな口調でカリヤが語る。

「くっ、そんなこと…これは、改造されただけ…ううっ…」

「だからよ。普通より、何千倍もいやらしい身体なんですよ…はあ…ん…前に私が、たあ…つぷり精液でマーキングしてあげたじゃない。それでアサギちゃんの身体が私のフェロモ

ンを覚え込んだじゃったの…さつきさくらちゃんも…んん…ふ…私のチンポってちよつと特別でしょ…あん…どんな男よりも精液多いし、フェロモンもキツイわけ」

語りつつも腰使いを止めないカリヤ。そう言われれば、眼前の巨大な肉柱から放たれる芳香のせいとか、先程からこの蛇女に軽く愛撫されるだけで、アサギもさくらもどうしようもなく欲情していた。

（ちゅぷっ…こいつに…こんな奴に…じゅぷっちゅぷっ…いいように、欲情…じゅるっれるっ…させられる、なんて…くっ…んんっ…れるっ…れるれるっれるっ…）

「つまり…対魔忍の二人の、超エッチな身体はこのチンポを突きつけられるだけで…んっ…はんっ…もうどうしようもなく欲情しちゃうわけ。とろっとろにね…あん…あ、そうだ…何故私が生きてたのか、教えてあげてなかったわね」

欲情と酸素不足で酩酊状態のアサギの意識にカリヤの言葉が届く。

「アサギちゃんの身体、フェロモンに支配されてるから…私には欲情しちゃって攻撃できないの…あはっ…それでカオス・アリーナの時も…はんっ…いいわっ…私には分身攻撃が発動しなかったってわけ…ま、そのへんの男じゃ、こんなにはならないけどね…」

（そんな…私は…この女を攻撃することができないというの？ この女に、このペニスに逆らえないというの…？ そんな…私は…ああ…駄目…匂いに…逆らえないっ…）

戦闘能力では確実に圧倒できる筈の相手に、手を出せないという信じ難い事実を明かさず、呆然とするアサギ。しかし彼女の淫らな肉体はカリヤの言ったとおり、フェロモンに

抵抗できずに宿敵の陵辱器官に奉仕を続ける。そして二人を支配する芳香の主のほうも堪らなくなってきたのか、喋りを止めて快楽を貪ることに集中しだした。

「さて、そろそろ…ああつ、はあつ、はっ…いいわつ、二人ともっ…もつと、もつと吸ってっチンポっ、私のチンポっ…口で、姉妹口まんこでっ…おおっ、おおおっ…」

じゅぷっちゅぷっじゅぷっちゅるっ…れるれるれるるっ…。

実の姉妹に同時奉仕させるといふ背徳的な快感に酔いしれたのか、陵辱者の腰使いはどんどん加速していく。アサギとさくらもまた興奮したのか一層強く抱き合い、その圧力により二人の間を出入りするペニスへの快感はさらに高められた。そして押し込まれる一瞬一瞬に加えられる口唇奉仕。右には姉の厚めの唇と舌がねっとり舐め上げる摩擦感が、左には妹の小刻みに動く唇がキスの雨を降らせる、さざ波のような快美感が。

びゅるっびゅるっびゅるっ…。

その奉仕に応えるかのように、透明な粘液が次々に噴出し、姉妹の頬を潤す。

(ああ…射精っ…もう、精液来る…ああ…精液…飲まされる…っ)

(凄いい、さっきよりも大きくなってる…さっきよりも沢山精液来ちゃう…の…?)

両性具有美女の下腹部の中で、欲望の袋が膨張の限界を迎えた。凄まじい勢いで海綿体の中を駆け上がる高温高圧の奔流のもたらす快感に、最強姉妹を屈服させるといふ、勝者の愉悅に陵辱者は瞳を細め、獲物を飲み込む蛇のように顎を開いて咆哮する。

「おおおおっ、いくっいくわっつ、アサギちゃんっさくらちゃんっ、二人ともっ染めて

あげるっ…私のザーメンでっ…ほおおっ、おほおっ…私っ、私のよっ二人とも…フェロモンザーメンでっ…私のマークキングしてあげるっ…おほおほおほううっ！

ぶぶっぶしゆるるっ…！

姉妹の鼻の下で、先程に勝るとも劣らぬ勢いの白濁液が炸裂する。くらくらするほど強烈なフェロモンを浴びせられて、二人も感極まったようなうめき声を上げた。

「ひああああっ…熱いっ…精液…あああっ…おかしくなっちゃうっ…」

「んんんんっ…んんんんっ…凄…凄…あ…んんんんっ…」

結合し抱き合う生贄の女達の間で、ごっごっした蛇ペニスを手当たり次第に太い欲望を噴射しながら前後左右に暴れ回る。

「まだよ、まだまだ出るわよっ…飲んでっ二人でっ…おほおおっ…飲んでっ姉妹でっ…ああ、素敵っ…私のもにつ…マダムから奪ってあげるっ…ああおおおっ…！」

命じられるまま、いや命じられる前から姉妹は開閉する鈴口に唇を寄せて、噴出精液を貪っていた。叫びの合間に精液の弾ける粘液音と液体を嚙下する淫らかな水音が響く。

(ああ、凄…んんんん…んんん…凄…ご…ご…び…び…駄目、止まらない…)
(は…ん…ん…熱…熱…止まらない…び…び…お姉ちゃん…)

「ああ、ああ、はあ、はあ…素敵よ、二人とも…最高だったわ…」

炭酸水にハッカタブレットをぶちこんだかのような射精がようやく終わった。だが、ふたなりフェロモンに酩酊した姉妹は、ペニスを引き抜かれたことにも気づかずに、お互い



(ああ…水…水が飲みたい…誰か…来ないかな…誰か…私に…飲ませて)

アサギの思考は朦朧としつつあった。彼女の『利用者』が多かったのは最初の二、三日だけで、あとは飽きられたのか徐々に利用者は減っていった。そのため、昨日か昨日あたりからは精液どころか尿すらろくに飲めていないのだ。

さらに彼女の改造肉体の淫乱さが知れ渡ったのか、弱者をいたぶるのを好む卑劣な地下住人達に、乳首や下半身を責めて体力を消耗させるといふ悪質な悪戯を、幾度となく仕掛けられていた。栄養どころか水分すら不足する状態に陥ったうえに体力を一方的に奪われて、さしもの対魔忍も衰弱死へと近づきつつあった。人としての誇りも摩耗著しく、卑しい男達の排泄物への拒絶心は消失していた。

ぼんやりと霞む視界に男の姿を見つけて、アサギはひび割れた唇で懇願する。

(ああ…言わなきゃ…今度こそ、飲ませて貰わなきゃ)

「その方…どうか、お願いですから…飲ませてください…おしっこでも、精液でも…お願いです。私…私、生きなきゃ…いけないんです」

アサギの必死の懇願が通じたか、その小男はひげ面の頬にうす汚れた笑いを貼りつけて、歩み寄ってくる。彼女の憔悴しきった顔をじろじろと眺め、せせら笑うように言う。

「ほお、おまえが例の肉便器かい。そんなに俺のチンポを銜えたいのかい？」

「はい…肉便器のアサギです…貴方のおちんぼを…銜えたくて…精液…おしっこを…飲ませて欲しくて…たまりません…どうか、どうか…ご奉仕させて、ください」

彼女の傍らには誰の気遣いか、ドワーフでもフェラを楽しめるよう、台が置いてある。小男はその上に乗ると、突き出た団子っ鼻をひくつかせた。

「んー、臭えな。こんな汚れた便所じゃ出す気にもならん。こう見えても俺達ドワーフは奇麗好きなんぞでな」

「あつ、そんなつ…ごめんなさいつ…臭い肉便器でごめんなさいつ…その分、一生懸命ご奉仕しますから…おチンポっ吸って、一杯舐め舐めますからつ…どうか、どうかっ…」

何としても生き延びねばならないアサギは恥も外聞もなく哀願する。

「はっ、みつともない便器だな。まあ、いくら言われたって嫌なもんは嫌なんだよ…ああそうだ、こっちはどうか？」

必死の懇願をスルーして、ひげ男は台から降りると固定された下半身を覗き込む。そこには幾度となく汚されながらも、変わらぬサーモンピンクの襷を咲かせた淫花が息づいていて、本人の意思とは関わりなく、雄を誘うようにひくひくと蠢く。

「んー、多少はマシだな。よし、我慢してこっちを使ってやるか」

めりりっ…。

早速、アサギの膣肉を熱く硬い異物がこじ開ける感触があった。乾いていたにもかかわらず、その脊髓をばりばりと快楽が走り抜け、潤滑液の分泌が始まる。体格に見合わぬサイズのごつごつした怒張が、ドワーフ特有の強力な腰で杭打ち機のように往復運動し、人間便器の胎内を抉り抜いていく。内臓を揺さぶられるような快感の波が次から次へとこみ

上げ、消耗した対魔忍の身体中の血を沸き立たせる。

ずしっずしんっ…ずんっずんっ…ずっずんっ…

だが、いくら下半身に射精されても、放尿されても、それは彼女の体力を削ぐだけの行為なのだ。ずんずんと地霊巨根に小突かれながら、アサギは命の水を飲ませてもらうために媚を売る。その顔にもはや対魔忍の鋭さはなく、切れ長の目尻は下がり、口元は緩む。

「あつ、はあああつ、あ…ありがとうございます。気持ちいいっ気持ちいいですつ…あつはあつ…はつ…感じますつ…でも、終わったら…上の口にもおしっこ、飲ませていただけませんかっつあはあつ…おっお願いですつ」

「ふっほっほっほっ…うるせえ便器だなあ…具合はいいんだが、こうもおしゃべりじゃ…はっほっはっほっ…気分が削がれるつてもんだ…ほっほっほっ」

文句を言うドワーフだが、腰は止まらない。粘液を溢れさせながら抽送し続ける。彼女も巨根ピストンに反応して頬を赤らめ、身体に汗を浮かべ始めた。

「ごっごめんなさいっあつあつ…黙りますつ…んっんんああつ…んんんっ…」

慌てて口を閉ざすアサギだったが、嬌声までは止まらなかった。ドワーフは遠慮なく腰を使い、勝手に射精に向けて快感を高めていった。

ずしんっずしんっずんっずんっずんっずんっ…

「ほほっおほっはほほっ…いくぞっ…おほっいくぞっ、おおっひほほほっつ…」

「あっあひっあああつ…んあつ、ああつ…いいっ…ちんぼっいいです…あああつ…」

ぶっつびゆるるるっつ…!

アサギの胎内で、水風船が破裂でもしたかのような勢いで、熱い奔流が弾けた。ドワーフは小柄な身体をぶるぶると震わせて、人間とは桁の違う量の精液を注ぎ続けた。乾いた大地に水が染み込むように、精液の熱さが発情子宮に浸透し、激しい快楽を伴う収縮を生み出す。衰弱著しいにもかかわらず、アサギも絶頂へと追い上げられていった。

「んっあっああっつっ…精液っ…射精されてっ…ああっ…まだ、まだ出てるっ…ああっ…あっあああっつ出されていくっ…精液一杯っ…中だしされてっ…ああああっつ…駄目っ…死んじやうのに、イっちゃやう…気持ちよくなっちゃやうっ…ああああああっつ…!」
乳房を、太腿をぶるぶると震わせ、括約筋を強張らせる。全身から貴重な汗がどつと噴き出し、弛んだ目元には雫が光る。

「おっほほほほっ…おほっほほっほっ…ほほほほほっ…ほっ…ほっ…ほう…」
長い射精が終わる。小さな陵辱者はペニスを引き抜くと、アサギの身体から離れて立ち去ろうとしていた。

「ふう、すつきりした。なかなかいい便器だったぜ。それじゃあな」

「え、あ…ああっ…ちよつとっ…待ってくださいっ…お、おしっこ…おしっこ飲ませて…くださいっ…嫌っ…そんな…私、死ぬ…死んじやいますっ…」

身動きの出来ない彼女は、必死に射精を済ませた雄を引き止めようとする。

「うるせえな。勝手に死ねよ。じゃあな」

「ああっ…そんなっ酷いっ…お願い…お願いですから…ああっ…」

だが、ドワーフはそう言い捨てると姿を消し、あとにはただ乗りされ、またしても体力と水分を奪われた囚われの対魔忍の悲痛な叫びだけが残った。

さらに無情な時間は過ぎる。アサギは刻一刻と生死の境界に近づいていた。脳に糖がいかないため思考力は著しく衰え、視界はぼんやりと霞む。体内の水分も極限まで失われており、眼球も、口内も乾燥して久しい。ただ、このような状況にあっても呼吸だけは規則正しかった。対魔忍の修行の賜物か、それとも妹を想う姉の執念なのか、無意識のうちに気を練って肉体を制御することで、かろうじて生命を維持し得ているのだ。

そんな彼女の前に一つの人影が立つ。

(…あれ…女?)

その丸みのある輪郭に、混濁した意識が疑問を抱くが、それもすぐ消える。その人影は彼女に向けて巨大なペニスを突き出してきたのだ。朦朧とした視野にあっても、猛々しくいきり立った肌色の幹、大きく張り出したピンク色の亀頭はすぐに認識できた。かつてはおぞましいだけだった陵辱器官も、今の彼女にとっては命の糧となっていた。

「あっ…あああああっ、ありがとうございます、んんっ、んむんむむっ」

ちゅぷっちゅぷっ…れるれるっ、れるるっ…ちゅぷっ、じゅぷぷっ…。

久々の食事だった。やつれた顔に心からの喜びを浮かべ、巨柱を頬張るアサギ。乾いた

瞳にも陶醉の色が浮かび、頬に歡喜の血色が戻る。心なしか他の男とは違う甘い香りが鼻腔に漂うが、そんなことはすぐに忘れ、唾液を何とか絞り出して口中の巨塊に塗りたくった。ひび割れが当たらないように工夫しながら、唇で幹をゆつくりとしごき、鈴口から身を吸い出すようなつもりで吸引しつつ、舌の腹で裏筋をこしごとと擦る。

(ちゅぷっちゅるっちゅぷっ：あつ、出てきた：れるえるれるるっ：先走りが出てきたっ：ちゅぷっ：美味しいっ：じゅううううっ：)

奉仕に応えるかのように、巨根に見合った量の無味粘液が噴き出し、アサギの喉を潤した。それに釣られてより多くの水分を期待し、瀕死の肉便器は懸命の愛撫を続ける。顎を動かして下唇で幹の裏側を熱心に擦る。笠と幹の間の鋭敏な部分に舌の脇を当てがい、滑らせるように往復させる。かろうじて動かせる頭を必死に振り立てて、大きな快感のストロークを作り出し、粘液と唾液でぶちゅずちゅという淫らな水音を響かせる。視界は相変わらずぼんやりとしていて見えないが、愛しいペニスの持ち主を喜ばせようと上目遣いで見上げるように微笑み、頬をすぼめて上唇を伸ばし、フェラ便器の顔をアピールする。

やがて奉仕の甲斐あって、ただでさえ巨大な龟头はアサギの口中一杯に膨らみ、ぶるぶると震え始めた。

(じゅるるるるっ：射精っ、ああっもうすぐ精液飲めるっ：れるれるるっ：欲しいっ：れるつれるれるるっ：じゅうううう：ああっ飲みたいっ精液っ：)

アサギは喉と横隔膜を使って口に含んだ巨大な肉兜を吸引しつつ、舌尖をくねらせて震

える鈴口をほじくり射精をねだった。先端部の割れ目の内側を乳頭状突起が擦るたびに、巨根の裏筋がびくんと脈動し、肉幹を通して付け根のあたりの筋肉がきゅつと締まるのが伝わってくる。

ぐぶぶぶつ。

ついに待ち望んだ報賞の瞬間がやってきた。人影は大きくため息をつくとき腰を突き出し、剛直をアサギの喉深くまで押し込んだのだ。咽頭一杯にまで巨頭が入り込み、扁桃腺にそのエッジがひっかかる。その刺激は、発情改造のせいで内臓をかき回されるような快感となって、彼女の意識をばらばらに引き裂く。

人影は、咆哮しながら欲望を解放した。

「つぽおおううつつ…！」

ぶぶぶつびゅつるるるるるるつつつ…！

（んああおおおつつ…！ 射精つ、精液つ…！ あああ…あ…ああつつ…！）

食道に直接、凄まじい量の灼熱の甘露が注ぎ込まれる。アサギは声なき歓声を上げながら久々の食料を嚥下していった。胃から立ち上る精液の匂いが全身の細胞に染み込むような錯覚を覚える。喉に、食道に当たる精液の衝撃と熱は疼くような愉悦となつて、衰弱した肉体に欲情の炎を掻き立てる。乳首が頭をもたげ、肉裂がひくひくと動き始めた。

フェラ便器は汚濁を嚥下しながらも、一滴もこぼすまいと唇をすぼめ、強烈に吸引を続けた。射精中に吸引されて精液が尿道を走る快感が増幅されたのか、人影は何やら叫び、

がくがくと膝を震わせる。

そして巨大な剛直はぶるぶるとわななきながら、たつぷり一分近く射精を続けた。その後、肉柱が引かれて、亀頭が舌の上にまで戻される。朦朧としたまま理性の戻らぬアサギは口に含んだまま絡みついた粘液を舌で舐めとる。飲精による栄養補給と、味蕾が痺れるほどの濃密な味が、彼女の肉体にさらなる興奮をもたらした。

(ああ…精液おいしかった…お掃除…奉仕しなきゃ…んん…あん…んんっ…)
じよっ…。

口中の逸物がぶるつと震え、鈴口から違う味の雫が舌に落ちた。

(！…おしっこ！ おしっこも飲ませてもらえる！)

思わぬ幸運の連続に飢餓状態のアサギは感動し、水分を漏らさず飲み干せるよう、唇をすぼめてペニスへの吸引を開始した。

ぶっ…じよ…じよろろろろっつっつ…。

すっきり肉便器に成り下がったアサギの口に、生暖かい液体が噴出する。塩辛く苦みばしったその奔流は舌に当たり、咽頭をくすぐりながら彼女の体内へと吸収されていく。口内を暴れ流れるその刺激は愉悦のうねりとなって広がっていき、先刻から強い興奮状態の多淫ボディを快楽の極みへと押し上げていった。

ちゅぶっ…ごくっ…ごくっごくっごくんっ…。

(ああっ…おしっこ、美味しいっ…口が、舌が気持ちいいっ…ああっあああっつ気持ち

いいっよくなっちゃうっ…気持ちよくなつて…おしっこ、飲まされて…あっあっ、あああ
ああっイっちゃああああああああっ…！)

乾ききった瀕死の肉体に水分が染み込んでいき、全身の細胞が待ち望んだ慈雨に歓喜の叫びを上げる。それは、アサギが通常の肉体の持ち主だとしても天にも昇るような感覚だったろう。だが彼女の肉体は通常よりも遥かに感度の高い淫乱仕様なのだ。口から、喉から、胃から、何かが解放されたような快感が脳へとわき上がってくる。背骨の中を悦楽の電流が駆け巡り、ポリマーの中の背筋が粟立つ。濁った視界に七色の星が飛び回り、ただでさえ朦朧とした意識がばらばらに碎かれる。拘束された四肢が、乳房が、子宮が痙攣し、淫唇はびくびくと震え貴重な体内水分を粘液に変えて噴きこぼした。

最強対魔忍アサギは飲尿で絶頂したのだった。恍惚に白目を剥き、小鼻が開き、唇だけはペニスを離さぬように突き出した便器顔を晒しながら。

「あふう、よかったあ。真心が籠っててすっごく気持ちよかったわ、アサギちゃん」

水分と栄養分を補給し、思考力が戻ったところに聞き覚えのある声がして、アサギは目の前の人影が誰であるかを思い出した。

「…カ、カリヤ？」

「ふふ、久し振りね、何とか生きててくれて嬉しいわ。今日はね、アサギちゃんに二つのニュースをもってきたのよ。片方はいいニュースで、もう片方はすごくいいニュースよ。



ゲッゲッゲッ……。うふふふつ……。チーッチーッ……。

様々な音色で不気味に嘲笑う魔物達。彼らに取り囲まれたまま、戦う術なく身を寄せ合う雌犬姉妹に向けて、女のような姿をした二体が歩み出た。

「さて、最初はわりとマイルドなところからいってみましょうか。こちらはギリシヤからいらした妖鳥ハルピユアさん」

カリヤに紹介された、白い羽毛で両腕と背中を覆われた裸女が、鳥のような笑い声を漏らしながら、鱗で覆われた足でアサギに近づいてきた。しつとりと妖艶に肉づいた肢体はほんのり桜色で白い羽を引き立たせ、金色に輝く猛禽もうきんの瞳が、獲物の身体を品定めする。

「そしてこちら、お馴染みのネコマタさんです。いいですねえ和猫」

身体を強張らせたさくらにしなだれかかる、黒髪を姫カットにした女は、言われてみると猫のような瞳をしていた。黒のビスチェスーツに覆われたしなやかな身体はスレンダーで、そんな筈はないのだがさくらよりも年下のようにも見える。そしてスーツの尻から伸びた二本の尻尾が、早くも生贄の腿のあたりをすりすり這いずっている。

両方とも不快なタイプではないのだが、相手が女の魔物だけに何をされるのか想像もつかず、内心に不安が募る。だがこの魔物達の相手をしなければ、宿敵・朧にたどり着く道は開けないのだ。

そんな緊張状態のアサギの耳元にハルピユアが囁く。

「ふふつ、そう緊張しないで。私と楽しいこと、しましょ」

さわっ。

「あっ…ふあっ…っ…く、あああああっ…」

妖鳥の羽毛がそつと脇腹を撫でたのだ。触れるか触れないかの微妙な接触は、甘痒い快感となつてさざ波のように全身の皮膚に広がっていく。アサギの鋭敏な肉体にとつて、それは二回目の欲情を催すのに十分な刺激だった。

「反応いいんだ。私も楽しくなっちゃうわ」

びくりと身体を震わせ、堪えきれずに吐息を漏らす生贄の姿に、魔鳥は楽しげに目を細めながら愛撫を続ける。

さわっ…さわさわっ…さわわっ。

ハルピユイアの繊細な羽は、アサギの身体をあちらこちらとくすぐっていく。太腿、尻、背筋、首、鎖骨、肩…微弱な横揺れをつけたそれが肌のすぐ上を通過すると、産毛を通して毛穴が刺激され、小さな無数の蠢く快感が染み込んでくるのだ。柔和な快楽に全身の緊張が解け、かわりに欲望が昂たかつていく。射精を終えてやや軟化していた乳首とペニス再び張り、雌器官と肛肉が結合を求めて蠕動し始める。だが。

「…んっ…ふ……んんっ…あ…ん…あ…あ…」

妖鳥の羽は決してそれらには触れない。乳房の周囲や、臍の下、小股をそつと撫でるところとはあつても、熱く切なく充血しきつた海綿体は素通りだった。度重なる調教と改造で淫乱化した肉体が、もつとダイレクトな刺激を切実に欲しているというのに。

(ああ……うっ……くっ……そんな……乳首と、ちんぽが疼いて……くっ……どうして触らない……触つてくれないの……ああっ、そんなところ、またっ……)

「ああああっ……ひっああっ……駄目っおっぱいっ、おっぱい嘔まないでっああっ……」

必死で欲望を押し殺すアサギの耳に、さくらの甘い悲鳴と、ぴちゃぴちゃという水音が響く。妹はネコマタの牙に鋭敏な勃起乳首を甘噛みされ、舌でざらざらとやすりがけされているのだ。痛みと混じり合った快感電流が、乳房の先端から胸の奥に流れ込み、全身に波紋のように広がっていく。さらに、柔らかな毛皮に覆われた二本尻尾が、怒張の先端部をちろちろとくすぐって、雄部分の衝動をも高めつつあった。

彼女はのけぞり、いやいやをするように首を振って身悶えるが、手足を絡みつかせたネコマタの運動神経を振り切ることはできない。

「ひっ……あっ……舌がっ……ざらざらがあっ……おっぱいっ……ざらざらでっ、びりびりっ……びりびり来ちゃうっ……熱いのっばんばんになっちゃうっ……ひっ……やあっ……いいいいっ……」

「ほら、早く母乳頂戴ニャ。さつきみたいに一杯出して、あたしに飲ませてニャ」

(さくらっ……あんなに責められて……ああっ、くっ……私、私も……んっ……あんなふうに乳首、ちんぽ……触って欲しい……っ……)

「あら、どうしたの、物欲しそうな顔して……どこか触って欲しい所でもあるの？ 妹みたいに、乳首とか、ファロスとか、虐めてほしいのかなあ？」

「！……っ……」

淫らかな笑顔で覗き込んできたハルピユイアに、アサギは思わず唇を噛む。だがその隣ではさくらが、姉が責められたくて堪らない乳首で果てようとしていた。

「いいいっつっつ…イクっ出るっ、おっぱい嘔まれてっ…！ ざらざらでイクっうっおっぱいちんぽで射精っつっ…あああああっつみるくっ射精しちゃううっつ…！」

びゅしゅるるるっ…。

びくびくと痙攣しながら、胸から白濁噴水を噴き上げるさくら。ネコマタはその片方に食らいつき、美味しそうに喉を鳴らしている。

「んん、んく…人乳…ちよつと熱め…んく、くっ…ん…濃厚…んんっ…」

「あひっあああっつ…びゆるびゆるおっぱいっ吸われて…ああおっつ…っ…っ…」

（ああっさくら…っ…気持ちよさそうに…んっ…駄目っ…そんな考えは…）

魔物に母乳を搾られて、悔しげながらも、放出の快感に陶醉する妹。その表情に羨望のまなざしを隠しきれない姉を、妖鳥のさえずりが誘惑する。

「ほうら言っつご覧、どうされたいの？ どうせ家畜なんでしょ？ 人間やめちゃったんだし、何を躊躇うことがあるの？」

理性を削られながら、魔物に責めを懇願するべきか戸惑うアサギ。その目の前に、今度はさくらをダウンさせたネコマタが近づき、頬にかかった母乳を舌で舐めとりながら囁いた。「妹のおっぱい、美味しかったんだけどどうもカロリー高めで気になるのニャ。だからバランスのために、今度はあんたのタンパク質飲ませて頂戴ニャ。いいでしょ？」

「ね、うんって言ってごらん？ 二人がかりで可愛がつてあげるから」

両の乳輪の少し外側を、妖鳥の羽毛がそとくすぐる。充血しきって過敏状態の亀頭にネコマタの吐息がかかり、妹を悶絶させた長い舌がちろちろと蠢く。もどかしい刺激の誘惑が度重なり、ついにアサギの理性は決壊した。

「…あ…ああ…ああ、あああつ…はいつ…お願いますつ…！ 家畜のアサギを、おっぱいと、ちんぽを虐めてくださいつ…！ あつ…あ、あつひあああああつ…！」

さりさりさりつ…。

アサギの胸に感電でもしたかのような喜びが走る。ついにハルピユアの羽毛が、そそり立った二つの乳首を包み込むようにして擦ったのだ。

ざりざりつ…！

「ぎひつあああひあああつ…！ ちんぽつ！ ざらざらつ、ちんぽがあつ…！」

性感神経を直接すり下ろされるような、苦痛にも似た快楽が、そそり立った肉柱から迸り、彼女の下半身を硬直させた。ネコ科の猛獣特有の、骨から肉を削ぎ取るためのざらついた舌が、限界まで勃起した被虐器官の裏筋をヤスリがけしたのだ。

「っひいっ…つあああつちんぽつ擦れるつ…！ ぎもちよすぎるつ…！」

ネコマタが肉頭をざらざらと舐めると、痛めつけられる薄皮からの快感が、尿道を伝って内臓の奥深くへと潜り込み、神経を焼き焦がしていく。

一方、乳首へのハルピユアの羽毛責めはリズムを崩さず、それがかえって快楽を効率



的に増幅していく。乳房一杯に膨らんだむず痒いような悦楽は、上半身を痺れさせる。散々じらされたうえに、乳首とペニスを二種類の異なる刺激で責められて、アサギは短時間のうちに軽く達してしまった。

「おおっおああああっっっ…出るっ先走りいいいいっっっ気持ちいいいいっっっ…！」

口から迸る破廉恥な啼き声に、白い喉と乳首に通されたリングピアスが共鳴して震える。硬直した手足が、女魔達の下でぶるぶるとわななく。そそり立った肉茎から、透明な先駆け液がまるで射精のようにびゆるびゆると噴き出す。一方、下半身の未だ満たされぬ膈肉が、肛腔が、淫乱な彼女の内臓達が、甘く疼きながら収縮し、雄による征服を待ち焦がれるかのように粘蜜を吐き出した。

「ああ…はあ、はあ…？」

射精射乳をしてはいないが軽くイッたアサギから、妖女達が不意に身を離した。その前にマイクを手にしたカリヤが立つ。

「はいちよつとごめんなさいね。えーとね、もう我慢できなくなった魔物の人達がいるみたいなの。アサギちゃん達もそろそろ、ぶつといの欲しいよね」

ずんっ…ずんっ…。

「ヴウッフウウウッ…」「ムフウウウ…サッサト俺様ニヤラセロ…」

響き渡る低音のうなり声とともに、ステージの中央へ、四メートル近い身長の大巨体が二つ、進み出た。どちらも筋肉の山のようなパワーモンスターだ。片方は眼を欲望にぎらつ

「かせた牛頭で、もう片方はひげ面の人間型頭部だが、どちらも下半身は毛むくじゃらの獣脚と蹄の半獣人だった。」

「はい、地中海はクレタ島出身のミノタウロスさんとサチユロスくんです。いやあ、お二人とも凄いのをお持ちですねえ。さて、じゃあ乱入いきますよ？」

「巨人達の股間には、まるで毛むくじゃらの杭のような物体がそり立っていた。戦車砲のごとき幹にはびっしりと暗褐色の獣毛が密生し、その上には子供の頭並の赤黒い笠が膨れ上がっている。生えているのがその場所でなければ誰もそれをペニスだと思えなかったろう。その毛皮から、離れていてすら汗を煮詰めたような強烈な雄の獣臭が漂ってくる。」

「二体の巨大な半獣人はダウン状態のアサギとさくらの後ろに回り込むと、両の腿をそれぞれ掌で掴み、後ろ抱きにするような姿勢で、自らの腹のあたりまで持ち上げた。まるで大人に放尿させられる幼児のような姿勢だ。」

「…あ…え…えっ…ああああっ?!」

「姉妹は背中に当たる熱いごつごつした岩のような感触と、強烈な雄の汗と獣の皮脂の混ぜた匂いに包まれて、次の魔物に襲われつつあることに気づいた。状況を把握しようとした目に映ったのは、自分の腿の間に挟まっている毛むくじゃらの太い肉筒だ。秘部に硬い毛皮をぐりぐりと押しつけられて、ずきずきと快楽が立ち昇ってくる。」

「常識はずれの大きさのため、それが何であるかに気づくまで数秒を要した。」

「ヴフオオオオッ…サア、ブチコンデヤロウ…イケニエ…ヴルルッ」

「なっ…こ、こんな太いのっ無理よっ…壊れちゃうっこんな、こんなの入れたら…っひっあつやめっ…ああつやめてえっつ、ああああああつっ…」

「大丈夫よ、ちゃんと入るように発情させてあげるから。ほら、ぼちつとな」

アサギの悲鳴を欲情リモコンで封じ込めてしまふカリヤ。ミノタウルスはにやりと獯猛に笑うと、串刺しにするために生贄の身体を胸まで持ち上げた。熱く硬い肉杭の先端がポタン一発で粘液したたる発情雌肉に押し当てられる。

「あっあああああつっ…やっあつあつ…こんなのっあああああ…」

欲情状態ではあつたが、期待だけでなく恐怖を感じて、何とか巨大なペニスから逃れようと身をよじるアサギ。しかし、巨大な左右の手のごつごつした親指と人差し指でがっちりとの太腿を握られているうえ、残りの三本の指で尻を掴まれ、下半身を固定されてしまっているため、迫り来る串刺しを免れることはできなかった。肉の処刑具は、生贄の恐怖を煽るかのようにひとしきり雌唇を擦って垂れ流す潤滑蜜を先端にまぶす。

「ヴフッ…フフフッ…」

「え…あ…ああつ…そっそこっ違うっ…ああつ…」

雄柱が淫唇から後ろに移り、もう一つの被虐器官のすばまりに押し当てられたのだ。

ドズッ…グググッ…ググッ…

「ぎひいっあああああああつ…があああああああつ…!!」

めりめりと音を立てて、巨大な異物が内臓をこじ開けて入り込んでくる。それは通常の

女体ならば、文字通り串刺しに匹敵する苦痛の筈だったが、アサギの改造肉体にとつては脳天まで突き抜けて魂を打ち砕く、強烈な快感だった。巨根の通過により括約筋が極限まで押し上げられ、そこを取り巻く性感帯がごりごりと摩擦される。熱い巨大な肉兜が腸の柔壁をアイロンがけするかのように圧迫する。体組織を目一杯引き伸ばされる感覚と、内臓への圧倒的な蹂躪という被虐感情が、直腸から脳天へと直撃して炸裂する。

「ひっぐいいいい……いいいい……あぁあ……ぎっひっ、ひいい……！」

その隣では、さくらがサチュロスに同じく立ち後背座位で貫かれ泣き叫んでいた。彼女は膣口を限界一杯まで押し上げられ、毛むくじやらの超巨根を根元まで撃ち込まれている。その合わせ目からは泡立つ粘液が溢れて魔獣の付け根を黒々と濡らし、さらに二メートル下の床まで糸を引いて滴り落ちていく。

『わはっはははっ、これは凄い。さすが淫乱家畜だ。あんなものが入って平気とは』

『赤ん坊サイズをピストンされるとは、アナルで出産を体験してるようなものだな』

グッ、ズググググッ……。

「あっぎいいいい……抉れるっつはらわたっ……抉れちやううおおっ……！」

身体ごと持ち上げるようにして、巨獣雄柱が引き抜かれていく。幹に密生した獣毛が粘膜をざりざりと擦り、張り出した笠が柔壁を容赦なく抉る。だが家畜改造の成果だろうか、姉妹の腸は雄を受け入れるための受容器官に成り果てており、極太の異物で内臓をかき回される刺激は、意識を吹き飛ばす魔悦となっていた。

「あつぐあああああつ裂けるっ！ 裂けちゃうっ！ お腹一杯っあああああつっ…！」
ズブズブズブズブ…。

身体が降ろされ、再び巨大な肉ハンマーが貫通していく。苦痛とも快楽ともつかない衝撃波に脳をかき回され、被虐姉妹の手足はびくびくとデタラメに痙攣し、見開いた目と口の端から涙と涎を垂れ流す。赤紫色の血管を浮かび上がらせた怒張は、身体の震えに合せて透明な粘液を噴きこぼした。

ズボッ…ッ…ズボッ…。

「…いつ…：…いぎいあああつ…：…!!」

決して小柄ではないアサギの身体が、標準体型のさくらが、軽々と持ち上げられる。その逆鉤あぐに改造で腸の側に作られていたらしい、女にはない筈の精液生産臓器を引っ搔かれて、二人の脳の中で真っ白な星が飛び散った。獣のそれと比べると慎ましく見えてしまう、血管を浮かばせる姉妹の剛直が、再び透明な粘液の噴水を迸らせる。

ズゴンンツツ…！

「ぎっひあああああつ…!!」

音がしそうなほどの勢いで落とされ、巨大な剛直ではらわたを杭打ちされる。目玉が飛び出しそうな快楽の衝撃が姉妹の意識を襲い、頭の中で赤い火の玉が爆発する。それから、ぐりぐりと先端を肉の壁ごしに子宮口に擦りつけて、一気に引き抜かれる。破裂しそうなほど勃起したふたなりペニスと乳房が、反動で勢いよく揺れ、跳ねる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

目覚めると、ゲーム&抱き枕情痴も着ってるよ!

AD MAG 魔法

偶数月 17日発売

るまる いてくる!

vol.68 2013 0円

ニ次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

02

680円

モグダン

奇数月 12日発売

コミックアンリアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

コミックプリズム vol.6

440yen

はや

不定期 発売

コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

クワンティス

強く美しいヒロインが、淫らに堕ちまくるアンソロジー!

奇数月 中旬発売

メガミクラインズ

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

ヴァルキリー

<http://www.comic-vaikrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!